悪辣執事のなげやり人生

コーデリア
ヴィクターとイザドラの母親。
息子に変な虫がつかないよう、
常に目を光らせている。
ヨランダ
ガーディガン伯爵家の女中頭。
長年仕えているため、
伯爵家のことを知り尽くしている。
ヴィクター
ガーディガン伯爵家の当主。
類稀(たぐいまれ)なる美貌の持ち主だが、
気難し屋で常に自室に籠っている。
軍人時代に大怪我を負い、
片手片足が不自由。
アルベルタ
田舎の貴族令嬢。
誰にも頼らずに生きていくのがモットー。
工場勤めをしていたが、
ひょんなことから
女執事として働くことに……
ラザレス
ガーディガン伯爵家の従僕(フットマン)。
同じ使用人として、
いつもアルベルタを気にかける。
イザドラ
ヴィクターの妹。
複雑な生い立ちにより、
我儘(わがまま)に育つ。
甘いお菓子が大好き。
登場人物紹介

目次

悪辣執事のなげやり人生　7
番外編　まどろみお泊まり会　283

悪辣執事のなげやり人生

第一章　人生とは、ままならぬものである

妙齢の女性が、目の前の大きな屋敷を切なげに見上げている。

彼女はアルベルタ・フラン・ド・キャスティーヌ。齢は二十六。工場勤めの労働者である。

アーモンド型の目に、スッと通った鼻筋。短く切り揃えられた濃いブラウンの髪はところどころ撥ね広がり、化粧っ気はまったくない。服装もシャツにズボンという飾り気のない恰好で、全体的に地味な美人という印象だ。

アルベルタが見上げているのは、大貴族ガーディガン伯爵家の都市邸宅。赤煉瓦造りの四階建てで、街の中でもひときわ大きな屋敷であった。

前当主が亡くなり、今は息子が当主を務めているというガーディガン伯爵家は、各地に広大な領地を保有している。その豊かな大地の一部を農業や畜産業を営む者たちに提供し、そこで生み出された野菜や乳製品を、商人を介して売り捌いているのだ。また、王都の周囲の土地は中流階級者の住宅用として、あるいは商業利用地として貸し与えている。

よってガーディガン伯爵家の者たちは、何もせずとも自動的に大量の収入が転がり込んでくるという、羨ましい環境にいた。労働者であるアルベルタにとっては、雲の上の存在である。

なぜ、彼女がこんなところにいるのか。それは、ガーディガン家の前当主夫人コーデリアから突然届いた手紙が原因なのだが――

面倒事を早く片付けるために、アルベルタは夜勤明けの疲れた体に鞭うちやってきた。彼女の住む工業地帯の街からここまで、馬車で一時間半ほどかかる。乗り合い馬車の御者からしっかりと乗車証明を書いてもらったので、交通費は伯爵家に請求する心算である。

手紙の内容を思い出すと、自然と眉間に皺が寄る。その刹那、ちょうど門から出てきた青年と目が合った。

「……」

「……」

アルベルタを訝しげに眺める、見目麗しい黒髪の青年。華美なお仕着せをまとう彼の顔立ちには、どこか幼さが残っている。まだ二十歳にもなっていないのだろう。

仕立てのいい服を着ているので、外見が重視される従僕だろうな、などと考えつつジロジロ観察していると、青年が口を開いた。

「……申し訳ありませんが、面接なら通用口へ回っていただけないでしょうか？　そこの柵に沿ってくるりと半周した先にありますので」

「ああ、悪かったね」

貴族の屋敷の玄関は、主人一家が出入りしたり、客人を出迎えたりする場所だ。使用人や贔屓にしている商人などは、屋敷の裏側の通用口を使用する。

どうやらアルベルタは、使用人の採用面接に来た者と間違われたようだ。
実際には面接に来たわけではなく、立派な客人であったが、恰好がまずかった。上下の服はアイロンがかかっておらずくたびれ、短い髪の毛はあちこち撥ねている。これで真っ当な客人と思われるほうが不思議なのだ。
自らの不手際を反省し、言われた通りに裏口へと回り込む。
通用口の鐘を鳴らすと、先ほどの青年が扉を開き顔を覗かせる。アルベルタがガーディガン伯爵家の家紋がついた手紙を見せて名乗った途端、青年は焦ったような表情を浮かべ、客間に案内してくれた。
贅が尽くされた家具などを眺めていると、紅茶と軽食が用意された。
給仕をする客間女中が、主人が来るまでもうしばらくお待ちください、と言う。
しばし軽食や紅茶を楽しんでいたら、アルベルタに手紙をよこした人物――コーデリア・ガーディガンが客室へとやってきた。
あまりに美しい婦人の登場に、アルベルタは思わず瞠目する。
輝く金髪を左右から三つ編みにし、後頭部でまとめている。これは最近の流行の髪型だ。ドレスは床に付きそうなほど長く、お尻の部分にはボリュームたっぷりの腰当てが用いられ、それによって腰が細く見えるようになっている。
アルベルタはその恰好を見て、婦人はこの後お茶会にでも出かけるらしいと見当をつけた。そのため、準備に時間がかかっていたのだろう。

コーデリアとアルベルタは簡単に挨拶を済ませると、向かい合って座った。
ガーディガン前伯爵の年齢から察するに、夫人であるコーデリアはおそらく四十代だろう。しかし、目の前の夫人は決して四十代には見えない。貴族の女性とは恐ろしいと、アルベルタはそっと目を逸らした。
「何か、失礼なことを考えていらっしゃらない？」
「いいえ。とんでもないことでございます、奥様」
しれっとした顔で、アルベルタはコーデリアの追及をかい潜る。
「それで、お話とは？」
「ええ、そうだったわね」
コーデリアは先程の従僕に目で合図を送り、銀の盆を持ってこさせた。そこには一通の手紙が載っている。
「お義母様からのお手紙よ。あなたに」
その言葉に、ハッと息を呑む。
何を隠そうアルベルタは、かつてコーデリアの義母であるマルヴィナ――ガーディガン伯爵家の大奥様に仕えていたのだ。
田舎の子爵令嬢であったアルベルタは、幼い頃から両親とそりが合わなかった。そこで十二歳の時に花嫁修業と称し、一人暮らしをしていたマルヴィナのもと、雑役女中の仕事に就いた。
マルヴィナに使用人としてのありかたや、貴族としての教養を厳しくしつけられたアルベルタ。

彼女は十年間、主人に心から仕え、教えを乞うてきた。

女中の仕事に反対していた父親からは、そんな仕事はさっさと辞めて見合いをしろ、と再三手紙を受け取った。しかし、アルベルタはすべての見合いを断ってマルヴィナの傍に居続けた。年老いて一人きりの彼女を、見捨てることができなかったのだ。

けれどほどなくしてマルヴィナは寝たきりとなって亡くなり、アルベルタは伯爵家からあっさり解雇された。マルヴィナと絶縁状態にあった息子の弁護士より、相場よりも少ない退職金を支払われて――

アルベルタが見合いを断り続けたことによって、実家とは疎遠になっていた。加えて紹介状もない状態では、次の仕事を見つけるのは困難であった。

結局、女中の仕事に就くことはできず、工場で働く決意をしたのが四年前の話だ。

なぜ今さら――と思いつつ、盆に載った手紙を眺める。

その手紙はひどく黒ずんでいたが、〝アルベルタ・ベイカーへ〟という宛名は辛うじて読める。

なおも手紙を見つめていると、コーデリアが簡単に事情を説明しはじめた。

コーデリアの夫であった前伯爵は、なんと実母であるマルヴィナの死を、家族に黙っていたという。そしてその死が明らかになったのは、前伯爵が急病で亡くなった数日後のことで、コーデリアが弁護士に義母の所在を尋ねたことによって判明したのだ。

前伯爵が生きている間、コーデリアは義母について聞くことを禁じられていたらしい。

「あなたを探すのに苦労したわ。名前が変わっているんですもの」

困ったコーデリアは、探偵を使ったという。

調査の結果、手紙の宛名にあったアルベルタ・ベイカー子爵令嬢は、国内のどこにも存在しないことが判明した。実はこの四年の間にアルベルタの両親は離婚し、アルベルタは母方の姓を名乗っていたのだ。

ちなみに実家とは絶縁状態であるため、アルベルタはベイカー子爵家が今どうなっているかは知らない。ただ、おそらく兄が結婚して爵位を継いでいるのだろうと思っている。

アルベルタは、一度濡れて、乾いたような手触りの手紙を開封した。

しかし、便箋は全体的に黒ずんでおり、インクも滲んでいて解読不可能な状態だった。

「お義母様は、三人に手紙を書いていたみたい。わたくしとわたくしの息子、そしてあなたに。けれど、息子とあなたの手紙は湿気で駄目になっていたわ。義母が亡くなってからずっと、物置きに入れてあったから」

「そう、でしたか」

アルベルタは胸ポケットに手紙を仕舞いこみ、頭を下げた。

瞼がじわりと熱くなる。

あの頑固なマルヴィナが、ただの使用人であった自分を気にかけてくれていたことが、何よりも嬉しかった。

アルベルタは工場勤めの劣悪な環境の中で、すっかりやさぐれていた。

解雇された伯爵家に呼び出され、てっきり面倒事に巻き込まれるのだとばかり思っていたが、

久々に温かな気持ちになった。また明日から頑張ろうという決意を胸に、その場を辞そうとしたのだが――なぜか引き止められてしまった。

「まだお話は終わっていないのよ」

アルベルタは、訝しげな表情を浮かべる。

「わたくしへの手紙に、あなたのことをよろしくと、書いてあったの。だから、あなたをここで雇おうと思っているのだけれど」

コーデリアの発言を聞き、アルベルタはパチパチと瞬きした。突然の申し出に言葉を失ったが、すぐに我に返る。

「それは――」

「今ね、ちょっとした事情が重なって、使用人を沢山解雇してしまったのよ。人手不足だから、お義母様が認めていたあなたが働いてくれると助かるのだけれど」

「奥様、それは無理な話でございます」

「……どうしてかしら？」

アルベルタは、黒い油が爪の中にまで染みこんだ両手をコーデリアに示す。

「……このように、私の手は上流階級の方に仕える者の手ではありません」

丁寧に洗っても取れないその汚れは、四年も工場勤めをしていれば気にならなくなっていた。

コーデリアは油で黒ずんだ爪先を見て顔をしかめている。しかし、それは汚れ仕事を知らない貴人としては真っ当な反応なので、アルベルタは気にしない。

彼女は十年もの間、使用人としてマルヴィナに仕え、貴族の子女としての礼儀作法なども習った。アルベルタには厳しく辛い毎日だったが、愛ある指導だったので、なんとか耐えることができたのだった。

しかし、その経験や教えも、四年間の工場勤めで失ってしまった。使用人としての礼儀も、貴婦人としての身のこなしも、すっかり忘れている。

これで納得してくれたかと思ったが、コーデリアは構わず話を続けた。

「お義母様は、厳しい御方だったけれど、わたくしにとっては良い姑だったの。だから、最後の願いくらいは叶えたいと――」

「しかしながら奥様、私の貴族としての矜持は労働の中ですっかりすり潰れて、なくなってしまいました。なので、ここで働いたら失礼なことをしてしまうかもしれません」

そしてアルベルタは、もう人に仕える仕事はできないと、はっきり伝えた。けれど、コーデリアも引かない。

「だったら、一年契約で働いてくれないかしら？　退職金も百ポンド出すわ」

百ポンド――貴族に仕える上級使用人、二年分の給料に相当する金額だ。それからさらに、伯爵家の都合で解雇する場合も同じ金額を支給して、次の職場も斡旋するという好条件も示された。

アルベルタが一年間あくせく働いて稼ぐお金は二十ポンドほど。コーデリアの提案は実に美味しい話だった。

アルベルタは戸惑いながらも、申し出を受け入れることにした。

「……おそらく、粗相してしまうと思いますが」
「気になったら即座に解雇するわ」
「左様でございますか。ならば」
さっそく従僕が運んできた契約書に目を通し、問題ないことを確認するとアルベルタは署名した。
しかし次の瞬間――
「ああ、よかったわ。執事をどうしようかずっと悩んでいたのよ」
――耳を疑うような言葉が聞こえた。
焦ったアルベルタは、もう一度契約書の内容を確認する。
書いてあるのは就業規則だけで、職種は記されていなかった。もう一度よく読み直そうとしたところ、従僕に書類を回収されてしまう。
「ふと思いついたの。あなた、すらりとしていて背も高いし、女性用のお仕着せよりは執事用の服装のほうが似合うんじゃないかって」
確かにこの短い髪の毛では、ヒラヒラの女中服は似合わないだろうな、とアルベルタは考える。身長も、近くに立っている従僕とさして変わらない高さだった。しかし――
「仕事着は亡くなった主人のものを仕立て直せばいいわね」
コーデリアはそう言って優雅に立ち上がり、残りの手続きを従僕に命じる。
「そんなわけだから、これからよろしく頼むわね、アルベルタ」
「マ、奥様！　待ってください！」

アルベルタの制止も空しく、コーデリアは部屋から出ていってしまった。

部屋に残されたアルベルタは、額を押さえて深々とため息をつく。
手紙を受け取ってすぐに帰るつもりが、なぜこんなことになってしまったのだろう。
「――奥様は、前の執事に襲われそうになったんだよ。だから、女性であるあんたに頼んだんじゃね？」
突然馴れ馴れしい言葉遣いで話しかけてきたのは、先ほどの従僕である。
アルベルタはキッと睨みつけるが、彼は構わず言葉を続けた。
「あ～あと、ここ一ヶ月で女中が十人免職になったんだけどさあ、全員、軍を辞めて帰ってきた旦那様に色目を使ったからなんだ。なんっつーか、旦那様にも原因があるっていうか、ないっていうか。まあ、有無を言わさずに解雇になって可哀想でもあるけれど」
ガーディガン家の現当主ヴィクターは現在二十八歳で、父親の死をきっかけに、実家に十四年ぶりに帰ってきたのだという。
軍に所属していた彼は、戦場で左足と右手を負傷し、後遺症が残った。左足は今も歩行が困難なので、常に杖が必要なのだという。
もともと家を継ぐ気はまったくなかったのだが、母親に懇願されて仕方なく継ぐことになったとのことだった。
そんなヴィクターは、女性ならばだれもが振り返るような美しい容姿をしている。

そのため、突如として帰ってきた美貌の主人に、若い女中達が骨抜きにされてしまうのも無理はなく――

「大切な息子をたぶらかされたら困るって、大奥様は女中を解雇しまくったんだよ。だからうちは目下、人手不足。そんなこんなで、旦那様は魔性の男、なんて使用人の間で囁かれている」

従僕は、うっかり魅入られないように気をつけろよ、とアルベルタの肩を叩く。

その注意喚起に、アルベルタは思わず苦笑してしまう。

「その、なんて言うか、ここは――とても愉快な職場、だね」

ありがたい情報を沢山提供してくれた従僕に、情報料として一ペニー硬貨を手渡した。受け取った従僕は、労働者階級の多くが使っている硬貨を見て不思議そうな顔をしている。

アルベルタは、彼はお坊ちゃんなのだろうな、と鼻先で笑ってから椅子から立ち上がった。

従僕の「次は三日後に来てくれ」という言葉を聞きながら、彼女は伯爵邸をあとにしたのだった。

◇◇◇

伯爵邸を訪れた日から三日後。

アルベルタは工場を辞め、荷物をまとめて伯爵邸に引っ越した。

一応服装も気遣って、街で白のブラウスと長い紺色のスカートを買った。これは労働者階級の一般的な女性の姿だ。髪の毛も櫛で丁寧に梳かしてきたので、前回のようなみすぼらしい姿ではないはず、と思いこんでいる。そして、今回は屋敷の裏にある通用口の鐘を鳴らした。

出迎えたのは、あの口の軽い従僕。さっそく出会い頭に失礼な言葉を投げつけてくる。

「お前、その服どこで買ってきたんだよ。色々ひどいぞ」

「そうかな？」

個人的には清潔感があって似合っていると思っていたので、従僕の言葉に首を傾げる。彼に言わせれば、寸法が合っていないので不恰好とのこと。出来合いの服を買うのはいつになっても苦手だと、元令嬢のアルベルタはため息をついた。

従僕に衣装部屋へと案内されると、そこには三人の女中が待機していた。衣装合わせをするようにと言って、従僕は部屋から出ていった。

アルベルタがぼんやりする中、女中達はさっそく採寸し、前伯爵の礼服を素早く着せてくる。

彼女達は驚くような速さで裾を詰め、腰回りを補正し、袖丈も調整していった。

他人からのお世話を受けるのは久しぶりであったが、令嬢として過ごしていた頃を思い出し、大人しく受け入れることにする。

完全に体に合うものになったわけではないが、パッと見て違和感を覚えない程度には仕上がっている。仕事着として渡された服は全部で五着あった。他の四着は綺麗に直しておくからと女中から言われ、部屋を出た。

すると、外で待機していた従僕に別の部屋へ連れていかれる。次に到着したのは化粧台などが乱雑に置かれた部屋で、女中の休憩室の一つだと説明を受ける。

アルベルタは仕事着が汚れないよう上半身と膝に布をかけられ、手の空いている女中に化粧をしてもらうことになった。

工場では白粉の粉が製品に付着するのを防ぐため、化粧は禁じられていた。よって、アルベルタは化粧品など所有しておらず、本日はすっぴん状態だったのだ。コーデリアの身の回りの世話をしている女中から、「女性の化粧は職場での礼儀なので、必ず毎日してくるように！」と怒られてしまった。

元々肌が白いので、そんなに濃く塗る必要はないだろうと言われ、薄く施された白粉に、唇の色に近い紅を引かれる。最後に整髪剤で前髪を横に流して固められた。これで一応、執事らしく見える。

準備が整い、アルベルタはコーデリアのもとへと連れていかれた。

完成した執事姿を見せると、及第点との評価だった。

さっそく仕事に就くにあたって、いくつかの注意点を告げられた。

「そうそう。あなた、戦火を逃れてやってきた隣国の没落貴族、という設定にしておきなさい。たしか、あなたの母上は隣国出身だったでしょう」

コーデリアの言葉に、アルベルタは訝しんだ。

「それは構いませんが、どうして？」

「女性の執事なんて前例がないからよ。やむをえない事情があることにしておいたほうがいいでしょう」

アルベルタの母親の故郷では、過去に市民が王族や貴族に対して謀反を起こし、王政が崩壊してしまったのだ。その騒ぎで一部の貴族は亡命し、いまだに自国に帰れずこの国で暮らし続けている者も多い。そのうえ、隣国は最近激しい戦火に呑み込まれているらしく、多くの貴族達が避難しに来ているのだ。

「気の毒な境遇の高貴な女性が、仕方なく執事をする、ということでいいわね」

「仰せのとおりに」

それに加え、もしアルベルタがおかしな言動を取った時に、異国人だから、と言い逃れするための対策でもあるとコーデリアは語る。

「ラザレス、しばらくはアルベルタの補助を頼むわね。事情を知っているのはあなただけだから」

「わかったよ」

コーデリアは彼の返事に顔をしかめた。

「これは主人としての命令よ。たしかにあなたはわたくしの甥だけれど、今は使用人の一人――勘違いしないで」

「……わかりました」

コーデリアは改めて従僕の紹介をする。ラザレス・アーチボルト。ガーディガン伯爵家の従僕で十八歳。子爵家の三男で、父はコーデリアの兄である。

従僕ラザレスがこの家の内情に詳しい理由がわかり、彼がただの噂好きでないことが判明した。

それから、ラザレスは他の使用人にアルベルタを紹介するため、とある場所へ案内した。
まずは使用人達の本拠地で、屋敷の一階――階下と呼ばれる場所にある厨房だった。そこで紹介されたのは、数少ない上級使用人の一人である料理長。
仕事中に呼びつけられて不機嫌顔の料理長は、齢四十位の男性であった。男装をしているアルベルタを見るなり顔をしかめた。
『なんだ、この女、男の恰好をして。気持ち悪い奴だな』
料理長は、異国の言葉で暴言を呟く。だが、偶然にもそれは彼女にとって馴染み深い、母親の故郷の言葉だった。ゆえに、はっきりと理解してしまう。
二人の間に流れる不穏な空気に気付かないラザレスは、決めていた設定を口にした。
「あ～、こいつは隣の国からこっちに亡命してきた貴族の気の毒過ぎるお嬢さんで、アルベルタ～……あれ、なんだっけ？」
「アルベルタ・フラン・ド・キャスティーヌ」
「ああ、そう、それ。こっちのおっさんはラファエル・ジョルジュだ」
それを聞くと、ラファエルは驚きの表情を見せた。まさか、目の前にいる男装の女が同郷の者で、しかも貴族だとは思いもしなかったのだろう。隣国で名前の間に「ド」が付くのは貴族である証だ。
「あ、そういえば、ラファエルも異国人だったな。どこの出身だったっけ？」
料理長は、従僕の問いかけを完全に無視している。
「ん、聞こえなかったのか？　ラファエル、出身は――」

「はじめまして、ジョルジュさん。こちらの言葉は不慣れなので、何か変なところがあったらどんどん指摘をお願いします」
「……あ、ああ」
「故郷の言葉は大歓迎なので、いつでも話しかけてくださいね」
そんなことを言ったアルベルタだったが、もちろん隣国の言葉は堪能ではない。聞き取りは可能だが、喋りはカタコトで怪しい。
アルベルタの働いていた工場では、先ほどのジョルジュの暴言よりもひどい言葉が飛び交っていた。そのため、アルベルタはたいして気にしているわけではなかったが、好きで男装しているわけでもないのでつい意趣返しのようなことを言ってしまったのだ。
気まずい空気を残したまま、従僕と執事の二人は厨房を去った。
次に向かったのは二階にある部屋。ノックをして入ると、そこにいたのは、艶やかな黒髪を縦に巻いた、気の強そうな十代前半の美少女だった。
「――誰？」
まるで汚いものを見るかのような顔でアルベルタを一瞥した少女は、ラザレスに問いかけた。
「アルベルタ・フォン、なんとか、さん。新しい執事だ」
「え？　なんで女性なんかが執事を？」
「決めたのは大奥様だからさ、詳しくはそっちから聞いてくれ」
強気な態度で挑むようにアルベルタの前に立った少女だが、コーデリアの名前が出た途端に、表

情が暗くなった。
ラザレスはその表情に気付かないのか、続けて言う。
「こいつはイザドラ。ヴィクターの妹」
「呼び捨てにしないでちょうだい！　それにお兄様は旦那様、でしょう？　今のあなたは従兄弟ではなくて従僕、立場をわかっているのかしら？」
「はいはい。申し訳ありませんでした、イザドラオジョウサマ」
「ラザレス・アーチボルト、口の利き方に気を付けなさい」
顔を真っ赤にして怒るイザドラを、ラザレスは飄々と受け流す。燃え上がった怒りの炎は、なぜかアルベルタに飛び火した。
「あなた、アルベルタとか言ったかしら？　いいこと、女性の執事なんて認めないんだからね！」
「左様でございますか」
なんと答えればいいのかわからなかったので、当たり障りのない返事をしたが、それすらもイザドラの神経を逆撫でする結果となってしまう。
感情的になって叫ぶイザドラの声を聞いて、誰かが部屋の外から声をかけた。
「いったい、なんの騒ぎです？」
扉を開けて入ってきたのは、四十代後半位の中年女性。女中がまとっているようなお仕着せではなく、動きやすく裾の長い、地味な色合いのワンピースに、腰の部分には紐でまとめた鍵の束をぶら下げていた。

その厳しそうな顔をした女性とイザドラを見て、アルベルタはこの家の禁句を口にする。
「おや、二人共よく似ている……？」
それを聞いた中年女性は、サッと青くなって息を呑んだ。
彼女の名はヨランダ・コート。ガーディガン伯爵家の女中頭で、勤続三十年――使用人の中でも重鎮とされている人物。そして、前伯爵の愛人であり、イザドラの実の母親だったのだ。
もちろん、この屋敷に来たばかりのアルベルタはそれを知る由もなく……
ヨランダとラザレスが言葉を失っている中、事情を知らないアルベルタとイザドラだけが、状況を理解できずにポカンとしていた。
部屋を辞したあと、アルベルタはラザレスに腕を強く引かれ、休憩室に連れ込まれてしまった。

ガーディガン伯爵家の前当主であったルシアン・ガーディガンには、十七歳の頃から恋人がいた。その娘の名はヨランダ・コート。言わずもがな、現伯爵家の女中頭である。
伯爵家の跡継ぎと、労働者階級の女中。
彼らが結ばれる未来などあるはずもなかったが、惹かれあった男女は欲望のままに愛を深めていた。当然、二人の恋は長い間秘密裏にされていたが、ルシアンがアーチボルト子爵家の令嬢、コーデリアと結婚し、長男であるヴィクターが生まれた年に、関係が露見してしまったのだ。
初めに気付いたのは妻であるコーデリアだった。妊娠中に不審な行動を繰り返す夫を疑い、使用人を使って調査し、発覚したのである。

その事実を知ったルシアンの母親であるマルヴィナは、今すぐ別れて、ヨランダを解雇するようにと息子に命じた。ところが、彼の父親である当時の伯爵が、その決定に待ったをかける。

ルシアンは幼い頃より医者になりたいと夢見ていたが、伯爵家の跡取りだったため諦めざるを得なかった。爵位を継ぐという将来を押し付けられ、夢を奪われる息子の人生を気の毒に思った父親は、心から愛する人までも奪ってはいけないと、そう言ったのだ。

もちろん、マルヴィナはそんな甘い考えを認めるわけにはいかなかったので、それから何度も息子に別れるよう責め立てることになる。その問題が親子の間の確執となり、長年にわたる争いの種になった。

反対に、コーデリアは大人しく義父の考えに従っている振りをしていた。

心の中は黒く燃え滾っていたが、それすら朗らかな笑顔の下に何年も押し隠してきたのだ。

それが夫への愛が変化した感情なのか、それとも何もないところから生まれた黒い感情なのか、今となってはコーデリア自身にもわからなくなっている。

転機はそれから十数年後に起こった。なんとルシアンの愛人ヨランダが妊娠し、子どもを産んだのだ。

ルシアンの父親は適当に養育費を払えばいいと考えていたが、信じられないことにルシアンはその子どもを自分の子として引き取ると言い出した。

その話を聞いたマルヴィナは激怒し、息子と愛人、生まれたばかりの子どもをまとめて追い出そうとしたが、やはり、この時も夫に止められてしまう。

これだけは認めるわけにはいかないとマルヴィナは繰り返し反対していたが、突然の伯爵の死によって事態は急変する。伯爵家の当主としての権力を手に入れたルシアンは、母親を家から追い出したのだ。

ルシアンの愚行を見た息子ヴィクターが家に寄りつかなくなったのは想定外の出来事であったが、ルシアンはヨランダが産んだ娘イザドラの婿に伯爵位を譲ればいいと、簡単に考えていたらしい。

「それで伯爵家は、しばらくの間諍いはなくなり――」

「……長い」

「いや、怖いのはこれからなんだって!!」

先ほど、イザドラと女中頭を見て、余計な呟きをしてしまったアルベルタは、ラザレスに誰もいない休憩室へと連行された。そして、これからの生活で迂闊な発言をしないために、この家の事情を聞かされていたのだった。

「その話はペラペラと喋っても平気なの？」

「だってお前がさっきみたいに、この家の特大地雷を踏みそうで恐ろしいんだよ!!」

アルベルタは伯爵家のドロドロとした裏事情に、うんざりしている。

「それで続きだけれど、話してもいいか？」

「……どうぞ」

「それで、結局、ルシアン叔父さんに文句を言う人がいなくなったから、イザドラは伯爵家の長女として引き取られた。でも、なぜかコーデリア叔母さんは乳母に預けるのではなく、自分が育てる

と言ったんだ」
「なぜかって、母性本能が刺激されたからでは？」
「違う。復讐だよ」
コーデリアは自分の子どもではないイザドラを、まるで目に入れても痛くないというように可愛がった。そんな妻を、夫であるルシアンは大切にしだしたという。
一方で、夫婦の幸せそうな光景を、ただの女中であるヨランダは眺めることしかできなかった。自分の子どもが不倫相手の妻に抱かれている。そのうえ、愛する人の気持ちが遠ざかっていくことまで手に取るようにわかっただろう。
コーデリアはヨランダに絶望感を与えるため、従順で寛大な妻と母を演じていたのだ。
「そして、ルシアン叔父さんが亡くなって、ヴィクターが伯爵家を継ぐことになったのをきっかけに、コーデリア叔母さんはイザドラに冷たくするようになったんだよ」
アルベルタはそれを聞き、納得したように頷いた。
「それで、大奥様の話題になった時に、あの子は表情が暗くなったんだね」
「ああ。本当に、今まで仲良しの親子だと思っていたから、俺も驚いて。ヴィクターもイザドラの件には知らん顔だしね」
子どもに罪はないのに、気の毒な話だとアルベルタは考える。
「けれど、叔母さんの復讐はこれで終わりじゃなかったんだ」
「……いや、もういいよ」

アルベルタの言葉を無視して、ラザレスは語り続ける。
「数日前の女中の大解雇は、一見ヴィクターを狙う女を遠ざけるために見えたけど、本当は女中頭であるヨランダを困らせようっていう意図があったらしい。人手不足を補うのに、一番苦労していたのはあの人だからな」
「ああ、確かに、彼女はひどく疲労困憊していたね」
以上が【伯爵家で本当にあった怖い話】である。
「せいぜい、背後には気を付けるこったな」
「それは、どういう意味なのかな？」
「叔母さんもヴィクターも女中頭も、皆、心の中に狂気を秘めているってこと。誰かの怒りと憎しみが最大値にまで膨れ上がって、この家で突然悲惨な殺人事件が起こっても何も不思議ではないってことだな」
「……それは、すごい」
話を聞き終わったアルベルタは、なんだか釈然としないような、モヤモヤした気分になる。
今もなお、復讐心を燃やしているコーデリア、家族の問題から目を背けるヴィクター、長年伯爵家に居座る亡き前当主の愛人ヨランダ。中でも、一番気の毒なのは何も知らないイザドラだろう。
正直、職場としては最低最悪の環境であった。
だが、契約を交わした以上、一年間は働かなくてはならない。これも一種のマルヴィナへの恩返しだと思い、なんとか頑張ろうと腹を括った。

窓枠が北風でガタガタと物音をたてる。ふと視線を外に移すと、雪が降っていた。その寒々とした風景は、現在の伯爵家を表しているようで切なくなる。

とりあえず、先ほどの話は聞かなかったことにしよう、とアルベルタは心に決めた。

だが最後に、ラザレスより注釈が付け加えられる。

「特に注意が必要なのはヴィクターだな。いつも持ち歩いている杖には仕掛けがあって、持ち手部分を捻ると中から諸刃が出てくる。そして服の下にも二丁、小型の銃を常に携帯しているらしい」

「まあ、なんと言うか、とても物騒なご主人様だね」

「ふざけたことを言っていると、問答無用で蜂の巣にされるからな。あの人は元軍人だ。武器の扱いに関しては専門分野だから、逃げれば大丈夫とか甘い考えは持たないことだ」

「極力気をつけるよ」

そして、アルベルタは問題の伯爵に紹介するからついてこいと言われ、嫌々それに従う。

二階にある、屋敷の中でも特に大きな書斎にヴィクターはいつもいるらしい。

戦争で足を悪くしているからか、あまり外へは出歩かないヴィクター。彼は夜会や晩餐会にも顔を出さないので、【引き籠りの伯爵】と噂されているという。

「基本的にヴィクター……旦那様は使用人に興味がない。だから、反応は期待しないように」

「了解」

扉を叩いて部屋に入る。部屋の中は数本の蝋燭が点っているだけ。昼間だというのにカーテンは閉ざされ、ひどく薄暗い。壁は本棚で埋まっているので閉塞感もかなりのものだ。

そして、執務机の椅子に腰かけている男は、ラザレスとアルベルタが入ってきても、書類へ向けた視線を動かすことはなく、驚きの無関心さを見せた。

アルベルタは蝋燭に照らされたその美貌に、思わずハッとする。

絹糸のような滑らかな金の髪は整髪剤で整えられておらず、前髪の隙間からはアイスブルーの瞳が覗いていた。顔つきは恐ろしいほどに整っており、絵に描いたような極上の美形がそこにあった。

だがしかし、伯爵家の裏事情を聞いたばかりのアルベルタは、彼の容姿をどうこう思う余裕などない。実に冷めた目で、彼を眺めていた。

一方で、ラザレスは新しく来た執事の紹介をし始めた。

「旦那様、新しい執事のアルベルタ・フラ……あー、えっと、キャス、キャスティーヌ？　さんです」

いつまでも名前を覚えられないラザレスに笑いそうになりながらも、アルベルタは自ら名乗った。

「アルベルタ・フラン・ド・キャスティーヌでございます」

案の定、ヴィクターは睫毛一本すら動かさない。その様子を見て、ついにアルベルタは噴き出してしまう。かたくなにこちらを無視する姿勢が、子どものようで滑稽に思えたのだ。

ぎょっとしたのはラザレスだった。笑うアルベルタに対しても反応を示さないヴィクターであったが、念のために言い訳をする。

「あーあの、この人は異国人で、しかも頭のネジが全部緩んでいる変わった人っていうか」

頭のネジが緩んでいる変人扱いをされたアルベルタは、さらに愉快になって声を上げて笑ってし

まった。
「な、うわ、もう、どうしてお前は!!」
ラザレスは深くお辞儀をして、へらへら顔の執事を部屋から連れ出すことにしたらしい。
再び先ほどの休憩室に連れていかれ、説教をされる。
「お前な、さっきの話、理解していたか!?」
「伯爵家で本当にあった怖い話？」
「そうだよ!!　死人が出てもおかしくないって言っただろう!?」
「ふふ、悪かったね」
「本当にそう思っているのか!?」
詰め寄られたアルベルタは、どうでもいいとばかりにラザレスから視線を外す。
「さっきの件で解雇になったらどうするつもりだ？」
「さあ？」
「旦那様が直接解雇処分をすれば、退職金なんか出ないかもしれないぞ!?」
「ああ、大丈夫。その時はまた工場に戻るだけだから」
お金の話をしてもちっとも動揺しないし、解雇になっても気にしないというアルベルタに、ラザレスは呆然としている。
「お前、どうしてそう、なげやりなんだよ？　それに、女なのに、楽な仕事に執着しないなんて」
ラザレスの問いかけには答えずに、アルベルタはにっこりと微笑んで、答えを誤魔化す。

人に仕える仕事は、相手を尊敬できるかどうかが大切だと、彼女は考えていた。最初の印象で、ヴィクターはそれに値しない人物だと判断したのだ。
しかしヴィクターの親戚であるラザレスにはそれを言うわけにはいかない。
いくらなげやりな彼女でも、その辺の分別はついているのである。
説教が終わると、屋敷の三階にある女性使用人の居住区に案内された。入口は鍵でしっかりと施錠されている。ここから先は男性は入れないので、女中が引き継いで案内してくれた。
ガーディガン伯爵家の使用人達はほとんどが住み込みで働いている。
下級使用人は二人で一部屋を使い、上級使用人の執事や女中頭、料理長などには個室が与えられる。アルベルタにも、西日が当たる一人部屋が準備されていた。
「お仕事は明日からのようです。食事などの決まりはそちらの冊子に」
「ありがとう」
このあとの時間は、荷物の整理などをして過ごすことになった。

◇◇◇

翌日、すがすがしい朝を迎えた。アルベルタはふわふわの布団の中で、夢見心地の気分でいる。
今まで暮らしていた工場の寮は二人部屋で、二段重ねの寝台がある部屋での共同生活だったのだ。
寝台はカーテンで仕切られていたが、基本的には落ち着けるような空間ではなかった。しかも冬は

寒く、夏は暑い厳しい環境であった。
それに比べてここは快適だ。広くはないが個室であり、寝台はいくら体重をかけてもギシギシとうるさい音を立てたりしない。布団も寮の硬い布団とは天と地ほども違う。
屋外にあるお風呂は共用だが、部屋には簡易洗面所と暖炉も付いている。
しかも、ここは王都でも数少ない電気が通る家であり、灯りなどはすべて電灯となっている。現在、王都での電気使用は、一部の屋敷の電灯、街灯、工場などに限られていた。
今まで蝋燭の心もとない灯りで生活していたアルベルタにとって、電気が通る家というのは驚きだった。生活環境だけは最高である。
家人や使用人達については——衝撃的な話があった気がしたが、すでに頭の隅に追いやっている。
アルベルタは寝台から起き上がり、背伸びをして身支度を始める。
彼女の新しい日々が、始まろうとしていた。

執事の仕事は山のようにあった。
伯爵である主人のスケジュール管理に客人のおもてなし、屋敷に届く手紙の仕分け、銀器の手入れと管理、夜間の戸締まりなど、挙げたらキリがない。
そんな執事の一日は、新聞紙にアイロンをかけることから始まる。
届けられたばかりの新聞紙を台の上に広げ、その上に布を置き、熱したアイロンを押し当てた。
作業をしているとラザレスがやってきたので、挨拶をする。

「おはよう。とても眠そうだね」
「ああ、おはよう。朝は駄目なんだ」
まだ太陽が昇って間もない時間帯だ。厨房では料理長と台所女中が、主人一家の朝食を作るために忙しなく働いている。
アイロンがけを終えたアルベルタは、新聞を冷ます間、視線を紙面に落としていた。
「水晶宮殿が完成したようだね」
「中心街にある、布で覆われた大きな建築物か」
新聞紙の一面には、【大文化展覧会の目玉、水晶宮が完成】という見出しが印刷されていた。
大文化展覧会とは自国の英知や文明を他国へ示す目的の催し物で、多大な予算を使った世界的行事だ。
その展覧会のために建設されたのが、鉄骨とガラス張りで作られた水晶宮殿。中には商業施設、博物館、植物園に美術館など、国内のありとあらゆる流行が集まっていると書かれている。
アルベルタが完成したら行く予定だと言うと、ラザレスは意外そうな顔をする。
「おかしいかな？」
「いや、そういうのに興味なさそうに見えたから」
「興味は、大いにあるよ。とても美しい建築物だと聞いていたから」
水晶宮殿は展覧会が終了するとすぐに取り壊される予定となっている。見に行けるのは今しかない。けれど、ラザレスは人混みが嫌だから行かないと呟いている。

「つーかお前さあ、旦那様より先に新聞を読むなよ」
「役得だよ、これは」
言い訳をしながら、熱が取れた新聞を綺麗に折り畳んで銀盆に載せる。それを、食堂にいる主人へ運ぶのだ。

食堂ではコーデリアとヴィクターが優雅に食前の紅茶を啜っていた。
美しい二人の姿を、アルベルタは眼福だと目を細めながら眺めている。朝食の配膳が終わる頃、イザドラがやってきた。
「おはようございます、お母様、お兄様」
沈黙。イザドラが食堂へ現れても、コーデリアとヴィクターはなんの反応も示さなかった。使用人も見ない振りをしており、アルベルタは異様な光景だと、顔をしかめる。
愛人の子どもを疎む母と息子。この事実は仕方ないが、見ていて不愉快であった。
使用人から家人に声をかけるのは禁じられていたが、アルベルタは一瞬の逡巡のあと、俯くイザドラに挨拶をした。
「おはようございます、イザドラお嬢様」
イザドラは驚いた顔でアルベルタを見る。目が合うと、アルベルタは笑顔で椅子を引き、座るよう示した。
依然として、その場の雰囲気は険悪だったので、アルベルタは適当なことを言って誤魔化すことにした。
「今日は素晴らしくいい天気!!　――あ、曇天ですね。今のは忘れてください」
外は今日も薄暗く、雲が広がっていた。工業が盛んなこの国は、排気ガスの影響で一年のほとんどが雨か曇りで灰色の空だった。
聞こえよく「霧の都」とも呼ばれているが、空気は悪いし水は汚いというのが現状である。
張り詰めた空気の食堂であったが、アルベルタの発言によりいくらかマシになったようだ。
そして、静かな朝はゆっくりと過ぎていく。
朝食の給仕が終わると、アルベルタは女中頭に呼びだされ、イザドラへの声かけを叱咤されたのだった。

昼頃、アルベルタがせっせと床磨きをしていると、ラザレスがやってきた。
「お前、またやらかしたらしいな」
「お陰様でね」
アルベルタは手を止めずに返事をする。
「どうしてイザドラに声をかけたんだ？」
「なんだか、気の毒で」
「同情なんてしていたら、ここでの仕事は務まらない」
「……そうだね」

わかってはいたが、実際に目にしたら黙っていることなどできなかったのだ。
まだ幼い少女になんてひどいことをするのだろうと、アルベルタは朝の出来事を思い出して静かに憤っていた。
彼女はここでのあり方を固め、決意した。
なるべく感情は殺し、ヴィクターやコーデリアに素の自分を見せてはならないと。
そうでもしないと、とてもやっていけないとアルベルタは考えていた。

夕方。厨房の力仕事から解放されたアルベルタは、ラザレスと屋敷の地下に来ていた。
「いやあ、地下は寒いね」
「お前、元気だな」
ラザレスが気の毒に思うほど、調理場の女中や料理長にきつい仕事を割り振られ、一日中酷使されていたアルベルタであったが、ほとんど疲労を感じさせない様子だった。流石は力自慢の元工場作業者だと、ラザレスは感心したように呟く。
二人は地下にある酒の貯蔵庫にワインを取りにきていた。
屋敷に保管されている酒の保管状態を記した貯蔵本は五年前から未記入で、前執事の管理体制の杜撰さがつい先ほど判明してしまったのだ。執事の代わりに酒類を取りにいき、不足分を注文していた料理長も、本の存在までは知らなかったようだ。
貯蔵庫の扉を開けると、ひやりとした空気が奥から流れてきた。そこには大量のワインの入った

樽と数千本はあろうかという酒瓶が並べられている。
「これはすごい」
「ああ。前の旦那様は酒好きだったからな。今の旦那様と大奥様はあまり呑まないから、宝の持ち腐れってやつ」
赤葡萄酒、白葡萄酒、果実蒸留酒、糖蜜蒸留酒に、発泡性葡萄酒など、さまざまな酒があったが、貯蔵本に書いてあった特別高価な品は、探しても見つからなかった。
「あ～、酒ももしかしたら盗られていたのかもな。管理者の家令や執事は役得し放題だったから」
「ああ、残念。見てみたかったな」
酒好きの中で伝説と言われる逸品が書いてあったので、ラベルだけでも見たかったアルベルタは肩を落とす。
「アルベルタ、お前、酒好きなのか？」
「嗜む程度にね」
実は無類の酒好きであったが、女性の趣味としてはいささか微妙であったので、曖昧に答えておく。
それから食後に出す酒を選び、食堂へと向かった。
地下の貯蔵庫に籠っている間に日が沈み、外はすっかり暗くなっていた。
伯爵家の面々の食事は終わっており、ワインを注ぐ名誉を与えられたアルベルタは、慎重な手付きで栓を引き抜く。

澱が入らないようにワインをガラス製の容器に移し替え、くるくると中の液体を回す。
まずはヴィクターのグラスに注いで前に置く。すると、斜め前より突き刺すような視線を感じて顔を上げた。コーデリアが扇で半分顔を隠しながらアルベルタを観察していたのだ。柔和な表情を浮かべていたが、その瞳の奥は決して微笑んではいない。
今朝、イザドラに話しかけたので、ヴィクターにも同様の行為を働かないか見張っているのだろう、とアルベルタは思う。そこで、心配いらないと伝えるために片目を瞑り、コーデリアに合図を送る。
媚を売られたコーデリアは呆れと驚き、どちらともつかない表情を浮かべていた。
今ので上手く切り抜けられただろうか？　そんなことを考えながら、アルベルタは給仕を続ける。
このようにしてガーディガン伯爵家の、一見すると平和な夜は更けていった。

◇◇◇

伯爵家に来てから数日経ったある日の朝。
早く目が覚めたアルベルタは、二度寝をすれば寝坊してしまいそうなので、そのまま支度することにした。
唯一灯りの点いている階下の厨房へ行くと、料理長や台所女中、女中頭がいつものように朝食の支度をしていた。昨日、台所女中の一人が解雇されるという悲しい事件が起こったので、その埋め合わせを女中頭のヨランダがしているというわけである。
厨房にひょっこりと顔を出したアルベルタは、ものすごい形相で皿を準備しているヨランダに、何か手伝うことはないかと聞いた。
「……では、居間と食堂の暖炉の掃除と薪の補充をして、そこにある酒樽を地下貯蔵庫へ持っていって、最後に野菜を洗った泥水を捨ててきてもらえる？」
思っていた以上の仕事を任され、アルベルタは呆然とする。どれも日雇いの雑役夫がするような力仕事ばかりだ。
「ぼーっとする暇があるなら動いてちょうだい。そこにいては邪魔です」
「……仰せのままに、女王陛下」
アルベルタが手を胸に当て、恭しくおじぎをすると、女中頭は目を見開いた。
「だ、誰が女王陛下ですか！　恐れ多いことを言うのではありません！」
「申し訳ありません、ミセス・コート」
アルベルタは、軽口をたたく相手は選ぼうと反省しつつ、廊下を歩いていった。

暖炉掃除は服が汚れてしまうので、園丁が着るような作業用の服を借りた。
居間の暖炉は屋敷の中で一番大きいので、時間もかかる。溜まった灰を円匙でかき出し、ブラシで丁寧に磨く。仕上げに鉄部分に黒鉛を塗って終わりだ。食堂の暖炉も同様の手入れを行い、外の倉庫から薪を運んでおいた。火を熾すのは別の女中の仕事なので、次の作業に移る。

酒の入った樽は階段までコロコロと転がして、ちょうど通りかかったラザレスと共に地下の貯蔵庫まで運んだ。泥の付いた野菜を洗った水も二人で運び出して、芝生の上に流す。

頼まれた仕事が終わったので、アルベルタは執事服に着替え、汚れた服を洗濯女中に渡した。次は鍵付きの倉庫に保管されている銀器の確認をラザレスと共に行うことにした。銀器は使用人や出入りの者などからの盗難を防止するために、厳重な保管と毎朝の点検をするのだ。二人は大量にある銀製品を、漏れがないように確認していった。

「つーかさ、お前、なんで朝からそんなにあくせく働いているんだよ。上司でもない女中頭に馬鹿みたいに仕事押し付けられてさあ」

「いや、人手不足を一人で補っているミセス・コートが気の毒で」

「それはあの人の監督不足が原因だから。お前が気に病む必要はまったくないのによ」

女性使用人の監督はすべて女中頭の責任だ。執事であるアルベルタは男性使用人の仕事や私生活について監督し、責任を負うのが仕事であるため、今回の件については本来ならば無関係なのだ。しかし――

「この前の失言も申し訳なく思っていてね。罪悪感からか、つい余計なことをしてしまう」

「まあそれは、知らなかったんだから仕方がないさ」

イザドラは産みの母が他にいるということを知らない。前回のアルベルタの失言でバレることはなかったが、女中頭の恨みを買うことになってしまった。

銀器の確認を終え、少しの間倉庫で話し込んでいると、扉が勢いよく開かれた。

「あなた達は、何をしているのです!?」

入ってきたのは怒りの形相の女中頭。噂をすればなんとやらと、アルベルタは思う。

状況が掴めていないラザレスは気の抜けた声で「へ、何が？」と問うが、女中頭は主人一家の朝食時間まであと十分だと言ってきた。

「え？　だってまだそんな時間じゃあ……」

ラザレスとアルベルタは倉庫の時計を見上げる。時計は止まっていた。

驚きの事実に気が付いたアルベルタは慌てて倉庫を出て、まっすぐ厨房へ向かう。

まだ、ヴィクターが朝食前に読む新聞紙にアイロンをかけていなかったのである。

「あ、アルベルタさん、アイロン火にかけているよ～」

「ありがとう、マリアさん！」

気の利く若い台所女中がアルベルタのためにアイロンを火にかけてくれていた。ここ数日、厨房の手伝いをするので仲良くなっていたのだ。

今日は夜明けから雨が降っていたからか、新聞紙の湿り気はいつも以上だった。時間が足りないと舌打ちしつつも、皺が付かないようにゆっくり丁寧にアイロンを当てる。なんとかギリギリ朝食の配膳前には間に合い、新聞紙を銀の盆に載せ、かけ足で階段を上がる。もう少しで食堂に到着するというところで、前方よりやってきた女中頭が眉をひそめ、新聞紙に手をかざした。

「ミス・キャスティーヌ、なんてことを!!」

そのまま腕を取られ、食堂の近くにある簡易台所へ連れ込まれる。

「あなたは、何をしているのですか⁉」
「はい？」
階段をかけ上がってきたことだろうか、それとも煤だらけの顔を洗ったあと、毛を整髪料で整え忘れていたことだろうか、と首を捻る。
「わかっていないようですね。……新聞紙ですよ‼」
女中頭は新聞紙を指差したが、アルベルタは首を傾げたままだ。
「ここまで言っても理解できないなんて‼　素手で触ってみなさい！」
白手袋を取ってアイロンを当てたばかりの新聞紙に触れる——とても熱かった。ここで、女中頭が怒っていた理由を理解する。このままの状態で触れたら、軽い火傷をしてしまう可能性があった。
「そのような新聞紙を旦那様に持っていこうとしていたなんて、恐ろしい‼」
「申し訳ありませんでした」
「旦那様には私から説明しておきます。あなたはそこにある茶器を片付けていなさい。食堂へ入る必要はありません‼」
「承知いたしました」
一人、二階の簡易台所に残されたアルベルタは、使用人としての勘がすっかりなくなっているのを、他人事のように感じていた。

アルベルタはその後も女中頭に下働きを命じられた。任された仕事は、蒸留室での作業。

蒸留室はお茶やお菓子の保存・管理を行う場所だ。薬草や花から香りなどを抽出し、化粧品や香り袋、芳香剤なども作る。他にも瓶詰の保存食作りや茶菓子を作るのも、この部屋を担当する女中の仕事だ。
午前中は在庫の確認と、三種類の果物の砂糖煮作りを命じられ、午後からはお菓子作りをするように指示された。
果物の砂糖煮やお菓子は伯爵家秘伝の作り方があり、レシピどおりに作業すれば誰でも美味しい物に仕上げることができるらしい。
砂糖煮を作るために用意されたのは、伯爵家の庭で作られた木苺と薔薇、果実汁を作った柑橘類の皮の三つ。その材料を綺麗に洗い、一度鉄板の上で熱した砂糖と混ぜて煮込む。
煮込んでいる間は木べらで混ぜ続け、灰汁が出たら匙で掬う、という作業をひたすら繰り返す。
出来上がったら煮沸消毒をした瓶に入れて完成だ。蒸留室にある管理帳に作った日と時間、担当者名を書きこむのも忘れないようにする。アルベルタは使用人時代に行っていたお菓子作りの手順を、徐々に思い出した。
昼食を挟んだあとは、スコーン作り。三時のお茶までに作らなければならないので、急いで取りかかる。
蒸留室にはオーブンがないので、アルベルタは厨房に移動した。そこで材料を集めていると、暇になった台所女中のマリアが手伝ってくれると言うので、アルベルタはありがたくお願いすることにした。

おかげで順調に調理が進み、予定時間ぴったりに焼き上がる。
「アルベルタさん、今日は蜂蜜と一緒に出すって書いてあるわね」
「蜂蜜は蒸留室かな？」
「そうだよ」
お茶の時間が迫っていたので、アルベルタは急いで取りにいく。
蒸留室に繋がる玄関前の通路を早歩きで通り過ぎようとしたら、コーデリアと鉢合わせした。
「あら、忙しそうね」
「大奥様、お出かけですか？」
「ええ、ちょっとね。帰りは夜になるわ。ミセス・コートにも伝えておいて」
「かしこまりました」
コーデリアの背後には、市場に売られていく仔牛のような顔のラザレスがいた。どうやら買い物に行くらしく、彼は荷物持ち、というわけであった。
女主人の後ろをトボトボと歩いていく従僕の肩を叩いて激励したが、自分も任務の途中であったことを思い出し、蒸留室へ急いだ。
蜂蜜を持って厨房に戻ると、そこには女中頭が待ち構えていた。お茶の時間が迫っていると急かされる。茶器の載った盆の上に蜂蜜を並べ、アルベルタは階段を上がる。主人へ持っていく前に二階の給仕室に行き、茶器を手押し車の上に置く。
両手で持たないといけない盆などは、一人の場合はこうして手押し車に載せてから持っていくのだ。決して、肘で扉を押し隙間に足先を入れ込んで開く、ということがあってはならない。
アルベルタはヴィクターの部屋の扉をトントンと叩く——が、返事はない。気にせずに外から声をかけ、勝手に中へと入る。
ヴィクターは執務中で、机の上には書類の山が築かれており、お茶を置く隙間などない。
「旦那様、お茶をお持ちいたしました」
相変わらず、アルベルタが声をかけても反応はなかったが、気にせずに語りかける。
「ちょっと失礼しますね」
ぐしゃぐしゃに丸められた書類をゴミ箱に捨て、カップを置く場所を作る。
ティーコジーの中のポットは、ちょうどいい茶葉の状態となっていた。陶器製のカップの上に、網目の付いた匙——茶漉しを用意して、その上から紅茶を注ぐ。
「旦那様、お砂糖はいかがいたしましょう？」
シュガーポットから砂糖を掬い、ヴィクターに問いかける。彼はもちろん無視だ。
返事を待っている間、アルベルタはいい機会だと思い、ヴィクターの横顔をこれでもかと観察した。どこから見ても良い男だ、と眺めていると手元の匙が傾き、カップの上にあった砂糖が紅茶の中にサラサラと入ってしまう。
「——あ」
気付いたときにはもう遅い。仕方がないとばかりに、砂糖の入った紅茶を匙で素早くかき混ぜて証拠隠滅を図る。これで大丈夫だと一人で頷きながら、次の作業へ移った。

「旦那様、ミルクはどういたしましょう？」
期待はしてなかったが、予想通りまったく反応がない。
「では、少しだけ入れますね、おっと！」
勝手にミルクを入れると、手元が狂って想定よりも沢山入ってしまった。ミルクはかき混ぜても証拠隠滅はできない。淹れ直そうかどうしようか考えたが、どうせ飲まないだろうと思い、結局雑に混ぜてそのまま出した。
ヴィクターの反応がないのをいいことに、適当な給仕をする。こうして任務を終えたアルベルタは、厨房に戻ってコーデリアが出かけたことを女中頭に伝えた。
「――なんですって!?」
「ですから、大奥様はお買い物に」
「あなた、一体誰にお茶を持っていったの!?」
「旦那様、に？」
イザドラはお茶会で不在だ。コーデリアも出かけたので、てっきりヴィクターの分かと思い込んでいたのだ。
「旦那様は今の時間帯、一番集中なさるので、お茶は持っていってはいけないのよ!?」
「わあ……左様で」
知らなかったのならば仕方がない。女中頭はそう言って許してくれたが、ヴィクターの紅茶には何も入れてないか問われると、アルベルタの目が怪しく泳いでしまった。すぐにそれを問い詰められ、勝手にミルクティーにしたことがバレてしまい、本日何度目かの雷が落ちたのだった。

◇◇◇

ガーディガン伯爵家で働き始めて一ヶ月が経った。ヴィクターとは会話を交わすことのない日々が続いている。そして、使用人の人手不足問題も深刻であった。
人がどんどん辞めていく伯爵家で働きたいと思う者は少なく、そのうえ美貌の当主に惑わされて屋敷を追い出される者も減ることはなかったのだ。
内情を嫌というほど把握しているアルベルタは、積極的に女中の仕事を手伝った。
というのも、ヴィクターから呼び出されることはなく、イザドラからも嫌われているため、アルベルタは手が空いている時間のほうが長かったからだ。

寝室にある角灯のオイル補充をして回っていたアルベルタは、ヴィクターの書斎の前でウロウロしている女中を発見した。気の弱そうな少女は、扉に耳を当てたり、拳を振り上げて叩こうとしたりと、悩んでいるようだ。
彼女の名前はメアリー・キットソン。先日まで洗濯女中をしていたが、大量の家女中が解雇されてしまったために、職種を家女中に変えられたのだ。
きっとヴィクターから返事がないから部屋に入れないのだろうな、と考え、声をかける。

「メアリー、どうしたの？」
「わ、わわっ!!」
「ああ、ごめんね」
メアリーはビクリと肩を震わせてから、アルベルタを振り返った。
「キャ、キャスティーヌさん、でしたか。すみません、大きな声を出してしまって」
「いや、大丈夫だけど。もしかして、部屋に入れないとか？」
メアリーは眉尻を下げながら、こくりと頷いた。
書斎（ライブラリ）の掃除は一日一回行（おこな）われている。ちなみに家女中（ハウスメイド）が掃除のために部屋に入ると、ヴィクターが出ていく、という仕組みだ。
女中は美貌の主人を目にする機会が少ないので、皆、ヴィクターの書斎（ライブラリ）の掃除をこぞってやりたがっていた。しかし、メアリーは気が乗らない様子だ。彼女は労働者階級の娘で、三年前から伯爵家で働いている真面目な使用人である。ヴィクターの部屋には勝手に入っていいことになっているが、メアリーは今まで洗濯女中（ランドリーメイド）として外で仕事をしていたので、急に任された屋敷内の決まりには抵抗があるらしい。
「メアリー、ここは勝手に入っても大丈夫なのだよ？」
「え、ええ。そのように聞いておりましたが、旦那様の部屋に勝手に入るなど、恐れ多くって」
アルベルタは、あそこまで他人を無視できるヴィクターを少しだけ不気味に思っていた。確かに美しい容姿をしているが、無表情かつ無感情というのは、まるで美術館に置かれた彫像のような、

温度のない作り物みたいだと感じている。
「そういえば、メアリーは旦那様にお近づきになりたいと思わないの？」
「と、とと、とんでもないことでございます!!　それこそ、大いに恐れ多い、恐れ多いことです!!　ま、街では使用人とご主人様の燃えるような恋物語が流行（はや）っておりますが、げ、現実では、絶対、絶対に、あり、ありえないの、です」
「そうだね。そのとおりだよ」
身分違いの結婚は、貴族社会では認められていない。露見（ろけん）していないだけで、恋愛沙汰はあるものの、損害を被（こうむ）るのはもっぱら身分の低いほうであった。
そうだとわかっているのに身分の垣根を越えて恋をした挙句、周囲にバレてしまい、職や住処（すみか）を奪われて路頭（ろとう）に迷った使用人は少なくない。
「あ、そんなことより先にここを掃除しなくてはいけないね。女中が解雇されたから、きっと二日位掃除していないはずだよ」
アルベルタはこの二日間、ヴィクターの部屋でゴミと煙草の吸殻の山が築かれていく様子を、さり気なく観察していたのだ。
「私も手伝うよ」
「え？」
アルベルタは書斎（ライブラリ）の扉を元気よく叩いて、今から掃除をする旨（むね）を伝える。そして、返事がないのをいいことに、勝手に中へ入った。主人に近づいて、退室してもらおうとアルベルタは話しかける。

「旦那様、少しよろしいでしょうか？」

笑顔で話しかけるアルベルタだが、一瞥すらしないヴィクター。本日も彼の愛想は安売りされていなかった。端整な顔は机の上にある書類に向いており、用件を述べる執事をまるでいない者のように扱う。仕方がないので、扉の陰から部屋を覗きこんでいるメアリーを手招くが、ブンブンと首を振って入ってこようとしない。主人のいる前で部屋の掃除をするなどありえないことだと思っているのかもしれない。

「――仕方がない」

それからアルベルタの取った行動は、使用人の範疇を超えていた。

まず、ヴィクターの手から万年筆を抜き取り、机の端にあるメモ紙にあることを書き込み、その紙切れを書類の上に置く。紙面には【お掃除をするので、出ていってください】の一言。そのメモを見て、ヴィクターは目を見張る。だが、落とされた視線が上がることはないし、ヴィクターは微動だにしない。その反応を確認すると、アルベルタはさらに一言を付け加えた。

「旦那様は、私の故郷の言葉はご存知ないようですね」

書類の上に置かれたメモは、隣国の言葉で書いてあった。アルベルタの母親の母国語は、貴族の通う学校では必須科目となっている。それなのにヴィクターは読めないのかと、小馬鹿にしたように言い放ったのだ。

ヴィクターが下を向いたままなのをいいことに、アルベルタはすっと目を細め、口の端を意地悪くつり上げた。

今日も綺麗に無視されて終わりか、と思っていると、ヴィクターはそのメモ紙を左手で一気に握りつぶし、ギッと睨みつけてきた。

「……おや、怒った顔もお美しい」

突然睨まれて驚いたが、アルベルタは軽口をたたいて受け流す。

ヴィクターは机を叩いて立ち上がると、そのままの勢いで部屋を出ていった。

アルベルタはその姿を軽く手を振って見送ったが、ヴィクターが歩行の補助をする杖を持っていないことに気付いた。

「旦那様、杖をお忘れで……ま、いっか」

忘れ物をした本人はすでにいない。歩行も問題ないように見えた。

机に立てかけていた杖が目に入り、手に取る。普通の品よりも、遥かに重い。持ち手の下部にはうっすらと切り込みがあり、そこを捻るとカチリと音が鳴る。慎重な手付きで柄を引けば、鋭い刃物が姿を現す。ラザレスの情報は本当だったと、アルベルタは一人慄いた。

「キャスティーヌさん、どうかしましたか？」

メアリーに声をかけられ、慌てて刃を仕舞い込む。

「いいや。びっくりしてさ。旦那様は怪我をした足を引き摺っているって聞いていたから」

歩いているヴィクターを見たのは今日が初めてだった。

「そうですね。とても、後遺症があるようには」

「だよね。いやはや、魔訶不思議」

それから主人のいなくなった部屋で、二人はのびのびと掃除を始めた。

◇◇◇

その日の夜、ラザレスは頭を抱え込みながら、叫んでいた。

「あ～～!!　もう、なんでこうなる、信じられない!!」

再度、女中が解雇になったのだ。

「流石に、盗みに関しては、ミセス・コートも庇いきれないよね」

「まったく、手袋なんか盗って、何をするつもりなんだか!!」

またしても、解雇の原因はヴィクターにあった。今回は手袋が盗難にあったのだ。

「旦那さまの象徴的な品物だからね、手袋は」

ヴィクターは常に黒い手袋を嵌めている。執務中も、食事中も、お茶を飲む時でさえ。それは紙を捲りやすいように、物を掴みやすいようにと作られた特注品なのだ。その手袋を、今回解雇になった女中は盗んで私物としていた。

アルベルタは女中の行動の意味を推測する。

「本人が手に入らないのならば、せめて持ち物を、とでも思ったのだろうか？」

「理解できないな!!」

本人は部屋に引き籠っているだけなのに、次々と女中達を誘惑しているかのようなヴィクター。

立ち読みサンプルはここまで